れば燒跡をさがし、つぎ合せて持歸るべき旨命せられぬ。よりて藤嚴大阪に下り、寶藏の燒跡をさぐり、新田肩衝しき肩衝玉かき、文琳小肩衝大尻張等の茶入を見出だし、假繼にして六月十二日京都へ持歸り、德川家康へ獻ぜしに、大に喜ばれ、其賞として米百石に二十人扶持を給はりぬ。猶他にも缺損せしものあるべしとして、再び搜索を命ぜられしかば藤嚴いそぎ大阪へ赴き、なほ寶藏の燒あとをあさり求めて付藻宗契肩衝針屋圓坐松本茄子等の茶入を得て、六月廿六日假繼のまゝ京都へ持歸り前の如く德川家康へ獻ぜしに掌うちて日本一の重寶者なりとほめられ、付藻を藤元に松本茄子を藤嚴に給はりぬ。これより陶器の缺損を漆にてつぐ事いできぬとなん。（茶道筌蹄、付藻松本茄子茶入の由來）

近藤道志

道志は道惠（通稱源助）の子にして、京師綾小路新町西に住し、小堀遠州片桐石州の定塗師にて多く茶器をつくりしが、この人ことにイヂ〳〵塗とは漆の上面に極細の波紋を起し、一種の雅致あるものなりとぞ。其子道喜も又よく漆器を製せしとなん。（茶道筌蹄、茶家醉古襍、鑿譜）

飛來一閑

一閑（イッカン）は元明人にて寛永中舊珉養寛等と俱に歸化せしものにて、號を朝雪筌、金剛山人、蝶々子などいふ。西湖飛來峰下の產なるを以て飛來を氏とし、一閑張をはじむ、千宗旦其製作品の雅致あるを愛せしより、其名顯はれて世人に賞翫せらる。晩年大德寺淸巖和尙に歸依し、禪學を修め、傍ら書畫をよくす、明曆三年十一月廿日歿す。年八十。紫野大德寺中高桐院に葬る。子孫代々其法を傳へて十二代に及べりとぞ。（茶道筌蹄、古書備考、工藝遺芳）

中村宗哲

宗哲（ソウテツ）通稱八郎兵衞、名を玄弼といひ、號を漆翁勇齊、又方寸齊といふ。點茶を好み、藤村庸軒と交り深し。この人より代々千家の塗師となれりとぞ。元祿八年五月歿す。年七十九。子孫相つぎて名工いでしと雖も世人ことに三代漆桶宗哲の作を賞翫せり。（工藝遺訓、茶家醉古襍）

中村系圖

- ○勇山宗哲（初代）— 通稱八兵衞　漆翁
  - 勇齋宗哲（二代）— 通稱八兵衞　元哲
  - 漆桶宗哲（三代）— 通稱八兵衞　漆齋　紹朴又勇齋
  - 深齋宗哲（四代）— 通稱八郎兵衞　漆翁　紹朴養子
  - 豹齋宗哲（五代）— 通稱八郎兵衞　後改三八兵衞一　漆畝
  - 猟齋宗哲（六代）— 通稱八兵衞　後改三八郎兵衞一

七代 貘齋宗哲 通稱八兵衛 得玄

山本利兵衛

初代利兵衛は實名を武繼といふ。元丹波桑田郡の人にして、寶永のころ京師へいでゝ吉文字屋某の弟子となり、鬆漆の法を學び、正德四年、とし廿九のときより開業せしが、忽ち鬆漆を以て都下に其名をしられき。ことに延享三年桃園天皇御卽位の時、漆器の調進を命ぜられしが如きは、この人一代中の名譽なりしとぞ。明和三年九月廿七日歿す。年七十九。洛東眞如堂に葬らる。其子孫代代利兵衛の名を襲用して鬆漆の業に從事せりといふ。（工藝遺芳、大澤氏筆記）

西村彦兵衛

彦兵衛は實名を宗忠といふ。漆器の名人にて、其製品いづれも優雅にして頗る風韻ありしとぞ。或年普賢菩薩の象に乘りし所の圖を蠟色金蒔繪の匾額にして、菩薩所へかゝげしもの一代中の出來なりしかば、これより京人其名を呼ばずして象彦と稱せしとなん。この匾額天明の火災に罹りて鳥有に歸せしといふ。安永二年五月十四日歿す。年五十四。寺町五條の南蓮光寺に葬られぬ。（工藝遺考、大澤氏筆記）

佐野長寛

長寛通稱は長濱屋治助、高麗の名工張寛五代の孫にして、黑漆塗に名あり。壯年に及びて諸國の

工場を歷遊し、能代は船中に細工場を設けて、仕事すれば塵かゝらず、吉野は漆樹の若きものを用ゐれば光澤よろしなど其場所に就きて漆工の仕方を研究し、後江戸に來たり、將軍の蒔繪師が紫漆を用ゐることをきゝ、其法を問ひしに祕して傳へず、長寛いと口惜しうをもひ、多年研究して終に自ら其法を發明したりといふ。文政八年、三十五歳にて京師に歸り、新町三條の家に閑居し、頭髮を櫛らず、鬚髯をうらず、身に弊衣をまとひ、常に新意匠のものをつくり出ださんことを勉めたりとなん。かゝる人ゆゑ己が意に適せざるものは千金をいだすも退けて製せざりしとぞ。文久三年某月歿す。年七十三。（工藝遺芳）

橋本市藏

市藏は鞘塗師又次郎の子にして、幼名を市三郎といふ。わかき頃はいと放縱にして花街にのみ遊ひしが、年廿二の時、父の重病に罹りしを見、大に前罪を悔いてふつと遊ぶことをやめ、專ら職業に心を委ねたりとぞ。市藏姓名の頭文字一字づゝをとりて橋市（はし一といふ燒印を捺しゝとぞ）と稱し、年々紺色木綿の頭巾にはし一の字を染ぬきて乞食非人に施しゝが、この事自然に世間へ廣まり、橋市の名高くなりにき。明治元年歳五十にして遁世し、頭髮を奴（ヤッコ）に摸し、醉阿彌と號し、常に刀に換ふるに、黃金もてはりつめたる摺鉢木を腰にさして逍遙せしとぞ。また上野に戰爭ありけるとき大旗をつくり、これに奴頭の目印をゑがき、其下に御鞘塗橋市と大書し、官軍の人々が刀の鞘を無代價にて塗り與へしとなん。このころ世間極めて不景氣なりしに芝新錢座會津屋敷跡の空地に辨財天を祀り、掛茶屋二百軒をたてゝ人に貸し與へしかば、同所俄に賑ぎて近傍數町の間爲に潤ひたりといふ。市藏天

性淡泊にして黄金を見ること土芥の如くなりしかば、土洲侯容堂大久保參議、木戸參議等に愛せられてしば〳〵大金を得しも、皆これを貧民に施し與へ毫も惜むの情なかりき。明治三年、土州侯の邸へ伺銚し、黄金の寛子に二分金をいれて與へられしに、市藏この金を土州侯鍛冶橋の本邸より箭崎橋の別邸に至る間の貧民に施して侯の德を分ち與へたりとて喜びぬ。又同じき年七月大久保參議の用にて京師へ赴き、五條坂の陶工清水六兵衞と深く交り、遂に六兵衞のこひにて、かの携へたる摺鉢木を二百金にて賣却せしが、また〳〵その金を町年寄某に託して同地の貧民に施し與へて身輕になりしとて笑ひしとぞ。大久保參議この事をきゝ、銀製の茶道具を贈りて其志をほめられしといふ。廢刀令のいでしより鞘塗の業を廢止し、竹摸造塗を發明して、額面、花生、菓子器、手箱、煙管筒等に施しゝかば、忽ち衆人の賞翫する所となり、はし一の名偏く都鄙にしらる。明治六年澳國萬國博覽會へ出品して有功賞牌を得、同じき十年第一回内國勸業博覽會へ出品して龍紋賞牌を得、同じき十四年第二回内國勸業博覽會へ出品して有功賞牌を得たりき。かくの如く内外博覽會へ出品して益々其名を揚げしに、一朝病に罹り明治十五年二月四日芝新錢座の宅において歿す。年六十六。市藏子なし。門人某を養ひて嗣とす。今二代橋市と稱し、其業をつぐ二代橋市談話

木村表齋

木村表齋は紫田藤兵衞の弟子にて、京都下京坂井町に住し、元江州高島郡小川村の人多く飲食器を製せり。この人もとより眞塗をよくせしも、また洗朱の根來風のもの得意なりしとぞ。京都の人其妙技を稱して佐野長寛以來の名人といひき。明治十八年四月、東京上野公園内において五品共進會を開かるゝ

や、表齋木皿、吸皿、猪口、盃、留津盃、盃臺の六種を出品せしが、其形狀のよろしきと共に髹漆の法巧なりしかば、漆器中の第一位を占め、二等賞銀杯を賜はりしといふ。漆器出品人中一等賞金杯をうけたるものなし この出品により一時都下にその名を喧傳せしも、開會にさきだちて病に罹り、同じき年二月十四日六十九歳にて歿しぬ。人々良工が生前にこの榮譽をうけざることをいと口惜しうおもひしとぞ。弟彌三郎二代表齋と稱し、そのあとをつげり。五品共進會審査報告、岸氏談話、大澤氏筆記、二代表齋筆記

石井勇吉

勇吉は越中高岡の人、父を石井勇助といひて指物師なり。天保十四年十二月二十六日生まる。わかきころは專ら好みて唐物彫をなしゝが、後髹漆に志し、唐山の堆朱、きんま、存星、青貝入、蒔繪などを摸造せしとぞ。明治六年澳國維府萬國博覽會へ科紙硯箱を出品せし以來、内外の博覽會共進會等へ出品して毎に賞牌を受けしが、ことに第二回内國勸業博覽會へ出品せし密陀繪歩障は三等妙技賞を得られき。この品は宮内省の御買上品となりて御府に入れり。この人元來唐山の髹漆を摸造することに妙を得しのみならず、自から工夫して古銅色塗、寶石嵌入などいふことを始められたり。明治十九年五月二十三日、年七十七にて歿す。其子某二代勇吉と稱して其あとをつぎ、これまた名工なり。野口氏筆記

五十嵐信齋

五十嵐信齋は足利義政へ仕へし蒔繪の名工にして、當時義政の命を蒙りて作りし所の蒔繪を時代物と稱し、また東山殿御物と號して世上の寶となれり。信齋の孫道甫の時道齋の子前田一家に聘せられ

て加賀に赴き、しばらく留りて蒔繪を同地の工人に傳へしが、後京師に歸り、延寶六年歿す。其子道甫喜三郎の時また前田利常に聘せられて加賀に赴き、それより代々金澤に住して前田家に仕へしとなん。（五十嵐家系圖、人倫訓蒙圖彙、和漢諸道具見知抄）

幸阿彌道長

道長は土岐伊豆守源國房十三代の孫土岐四郎太夫道房の子にして、四郎左衞門と稱す、幼年の頃より足利義政に仕へ、近江國栗太郡にて若干の地を領しぬ。義政の命により蒔繪の法を習ひ、當時無双の名人と稱せらる。其蒔繪にはつねに能阿彌相阿彌土佐光信などの下繪を用ゐしとぞ。（大抵高蒔繪には光信の下繪を用ゐ研出しには能阿彌相阿彌の下繪を用ゐしといふ）文明十年十月十三日歿す。年七十一。其子道清も亦蒔繪の名人にて後土御門天皇御卽位の時、義政より御道具の蒔繪を命ぜられたりといふ。（道清明應九年十月三日歿す年六十九）これより子孫代々蒔繪工を以て相傳ふ。（幸阿彌系譜蒔繪一覽）

幸阿彌長晏

長晏は幸阿彌家六代長清の子にして、十五歳の時父に從ひて豐臣秀吉公に謁し、御前にて香盆に梅に鶯の下繪をなし、御覽に入れしに、ことの外の喜び給ひて、鶯がタツタ〳〵と賞め給ひしとなん。後蒔繪して獻上せしに、見る人其精巧なるに驚きたりといふ。秀吉公の命により堀久太郎秀政が鳥帽子子となりて名を久次郎と稱せしとぞ。天正十四年後陽成天皇御卽位の時、秀吉公より御道具の蒔繪を命ぜらる。かくの如く秀吉公より優寵を蒙りしが、秀吉薨じ幾ばくもなくして大阪滅亡せしかば、慶長十五年德川秀忠に仕へ、二百石の朱印を賜はり、江戸へ下る途中、同じき年十月廿五日東海道見附驛において歿す。年四十二。（幸阿彌系譜）

幸阿彌長重

長重は幸阿彌長晏の三男にて幼名を新次郎といふ。幸阿彌家中最も名工の聞えありし人にて、德川秀忠より東福門院御入內の御道具（繪樣濃梨地に技菊）明正天皇御卽位の御道具（繪樣家光の好にて唐松に鳥下繪狩野守信但し高蒔繪）等の蒔繪を命ぜられ、また德川家光の長女千代姫の尾張大納言德川光友へ嫁する時、初音の棚の製作を命ぜられぬ。長重意匠をこらし、三年を費してしあげしといふ。其結構いはんかたなし。其繪樣は濃梨地に珊瑚をいれ、源氏物語初音の卷の、「とし月を松にひかれてふる人にけふ鶯の初音聞かせよ」の意を精密にまきたるものなりとぞ。慶安四年二月二十日歿す。年五十三。其子長房も亦名工にして、後西院天皇御卽位の時、德川家綱より御道具の蒔繪を命ぜられしといふ。（幸阿彌系譜、初音の柵の記）

幸阿彌系圖

- 初代 ○道長 — 土岐四郎左衞門入道幸阿彌　足利義政近習　近江國栗太郡ノ地ヲ領ス　文明十年十月十三日歿年七十一　法名宗月道長日輝居士
- 二代 道清 — 藤左衞入道法橋　御土御門天皇御卽位ノ節義政公ヨリ御道具仰付ラル此代ヨリ蒔繪師トナル　明應九年十月三日歿年六十九
- 三代 宗金 — 入道法橋　柏原天皇御卽位ノ節義澄公ヨリ御道具仰付ラル　大永七年十月十五日歿年七十一

四代 宗正　彌三郎
天文廿三年十月十三日歿年七十六

五代 宗伯　入道法橋宗金三次男　後奈良天皇御即位ノ節細川高國ヨリ御道具仰付ラル
弘治三年十月十三日歿年七十四

六代 長清　天下一　四郎左衛門入道法橋　正親町天皇御即位ノ節養輝公ヨリ御道具仰付ラル
慶長八年四月廿六日歿年七十五

七代 長晏　久太郎入道法橋　後陽成天皇御即位ノ節秀吉公ヨリ御道具仰付ラル
慶長十五年十月廿五日東海道見附驛ニテ落馬シテ歿年四十二

八代 長善　藤十郎後四郎左衛門長晏ノ長男
慶長十八年十月四日歿年廿五

九代 長法　長晏ノ次男
元和四年十月十三日歿年齢不詳

十代 長重　新次郎後與兵衛　長晏三男　明正天皇御即位ノ節秀忠公ヨリ御道具仰付ラル又寛永十四年　千代姫祝言着具家光公ヨリ仰付ラル　慶安四年二月廿一日歿年五十三

十一代 長房　與兵衛　後西院天皇御即位ノ節家綱公ヨリ御道具仰付ラル
天和三年十一月廿四日歿

十二代 長救　與惣次郎後與兵衛

十三代 正峰　四郎左衛門

十四代 道該　萬助　後改二長救一早世

十五代 長孝　正峰嫡孫

十六代 長周

十七代 長輝

十八代 長行　長輝ノ長男

十九代 長賢　長輝ノ次男

本阿彌光悦

光悦幼名は次郎三郎、太虚菴と號し、又自德齋、德友齋など號す。父を次郎左衞門入道光二といひ、母を妙秀といふ。光二は多賀豐後守高忠の二男、片岡次太夫宗春の三男にして、本阿彌光心の養子となり、其家を相續せしが、後光心の子光刹生れしかば、光三自から退身して別家となりぬ。光二慶長八年十二月廿七日歿年八十二　光悦幼年より多能にて、刀劍鑒定磨礪淨拭（ミガキノゴヒ）の三事に長ぜしのみならず、書畫をよくし、また陶器蒔繪をよくせり。書ははじめ空海をしたひて其蘊奥をきはめられしが、後道風の古今集につきて假名をもて習はれ、其妙境を得られき。この古今集は今本阿彌切といふものとかや、當時近衞三邈院八幡松花堂とを併せて三等と稱せられ、其流をうけ學ぶものも多かりしが、ことに嵯峨の角倉蘇菴上足の弟子なりしとぞ。畫は海北友松を師とし、土佐風を交へて別に逸格をいだせり。墨畫少くして設色の濃畫多し、また陶器は樂道入（舌兵衞のしこう）に就いて窯燒の製法を習ひ、一種の赤樂をつくられしが、多くは茶碗にしてまれに香台の類ありといふ。この他瀨戸光悦、膳所光悦、萩光悦、加賀光悦などありて皆世人に賞翫せらる。ことに蒔繪は能書能畫の力によつて一種の新意をいだし、鉛錫青貝をあしらひて繪樣を巧につくられしかば甚だ雅致ありき。これより蒔繪の風一變して其畫樣も支那畫にのみかたよらざることゝなりて、多くは優美高尙なる大和繪を下繪とし、また狩野家の繪を下繪とすることゝなれり。江戸將軍時代にいたり、蒔繪の著く進歩せしものは偏に光悦の力といふべし。一日光悦關白應山公（近衞信尋）の宴に侍す。公曰く予吉光と正宗との刀を併せ見て正宗の方勝ることをしれり。子が說如何。光悦曰く吉光の方勝れりと、互にかたく己が說をとりて議

論決せず、他日光悦公の宴に侍し、家隆卿の「あさひさすたかねのみゆきそらはれてたちもおよばぬふじのかはぎり」の歌を誦してその評を乞ふ。曰くまことに佳趣あるを覺ゆ、光悦また赤人朝臣の「たごの浦ゆうちいでゝ見ればましろにぞ富士のたかねに雪はふりける」の歌を誦して其評をこふ。公曰く佳趣なしといへども其調高し、光悦膝を進めて曰く、家隆の歌は正宗なり、赤人の歌は吉光なり、その妙鍛正宗に勝ること遠しと、光悦の才氣概ねこの類なり。京城の北鷹峰の地丹波に通ふ要路なれども、山嶺重疊樹木蓊鬱、人家至て稀れなりしかば、盜賊群居して往々行人を惱ましゝに、元和の初光悦この地を賜はり家居してより、賊恐れ避け去りしとぞ。光悦自ら了寂院と號し、晩に一寺を鷹峰に建て、光悦寺と號す、光悦性寡欲鷹峰に閑居するに及びて、資財を親族朋友に分け與へ、自ら麤器を擇びとりて茶を喫し、以て逸樂とせりといふ。寛永十四年二月三日歿す。年七十。（本阿彌系譜、畸人傳、皇朝名畫拾彙共に寛永十四年二月を以て歿年としたれども年齡に至ては或は八十に作り或は八十一に作り或は八十六に作りて何れを是なりとも定めがたし然るに古畫備考引くところ光悦詩歌卷物奥書によれば寛永六年八月日鷹峰山隱士太虛菴歲六十二とありこの年より算するときは寛永十四年は正に七十なりゆゑに今しばらく其說に從ふ）光悦寺に葬る。光悦子なし、光瑳を養ひて嗣とす。光瑳の子光甫（號空中齋）法眼に叙せられ、よく家をつげりとぞ。（翁草、文會雜記、陶器考、皇朝名畫拾彙、尾形流略印譜、古畫備考、扶桑畫人傳）

山本春正

春正（シュンシヤウ）は通稱次郎三郎、慶長十五年正月廿五日生る。父を山本俊正（通稱次郎兵衞扇叔髮して了悦と號す）といひ、新羅三郎義光の曾孫山本左兵衞尉遠江守義定の裔なりといふ。春正はじめ若狹少將木下勝俊の門に入りて和歌を學び、大に其道の蘊奥を極め、二十一代集類句の著あり、坂本にして世に行はる。また伊藤

仁齋を友として漢籍にも通ぜりといふことに髹漆を巧にして頗る蒔繪をよくせしかば、つひに蒔繪師となり、世人にもてはやさる。晩年剃髪して法橋に叙せられ、舟木と號す、天和二年九月八日歿す、年七十三、西林寺に葬る。其子景正（通稱次郎兵衛）姓を春正と改め、父のあとを繼ぎて蒔繪を業とす。五代正令（通稱勝之丞）の時、寛政元年正月尾張名古屋に移住し、それより子孫世々名古屋にて蒔繪を業とせしとぞ。（山本系譜工藝遺考）

山本系圖

○初代 春正 山本俊正嫡男 通稱次郎三郎 法號母木 天和二年九月八日歿七十三歲 號三玉島院中和一葬三于城州西林寺一

二代 景正 治郎兵衛 姓改三春正一小字七十郎 寶永四年二月六日歿 號三緣光院酧山春益一葬三于城州西林寺一

三代 政幸 八左衛門 小字兵太郎 剃髪號三山本常照一 元文五年九月十三日歿八十七歲 號二清心一葬三于城州西林寺一

四代 春繼 八左衛門 小字庄吉 寶暦十二年五月改三姓字一曰三柏木伸助一 明和七年五月十三日歿六十八歲 號三積山澄善一葬三于城州西林寺一

五代 正令 小字勝之丞 姓復三春正一 京師二條通東洞院東ト入所ニ住ス 天明八年正月晦日禁裏災燒之節類燒ス其後寛政元年正月尾州名古屋ニ移住ス及三老年一剃髪享和三年五月廿五日歿七十歲號三得往一葬三于名古屋南寺町原樂寺一

六代 正之 小字與三次郎 文政八年剃髪號三敬道一 天保二年十月七日歿五十八歲 葬三于名古屋柳樂寺一

七代 正德 小字吉次郎 號三鄙一菴一五十三歲ニテ剃髪シ家ヲ弟正周ニ譲ル

八代 正周 小字清五郎 正之ノ季子 兄正德老後家督ス 明治十年三月六日沒六十二歲

九代 正章 小字季太郎 弘化三年四月廿日生 明治十一年六月家ヲ弟正兼ニ譲ル

十代 正兼 小字千代三郎 實ハ正周ノ季子

椎原市太夫

市太夫は江戸の蒔繪師淸水源四郎の弟子にて、寛永の末前田利常に召抱られ、金澤の桶町に住し、印籠蒔繪に從事せしが、加賀印籠中（加賀印籠とて一風ありやさしくして蒔繪など甚だ巧にしほらしきものなり）ことにすぐれたる名人なりしとぞ。また世に翫ぶ加賀蒔繪の香合も多くはこの人の作なりといふ。元來茶人のきこえもありしほどの人ゆゑ、其意匠風雅にして品高かりしとなん。市太夫三子あり、藤藏友之進市之丞といふ。三人とも互におとらざる蒔繪の上手にして、職業の餘適に伯は皷をうち、仲は笛をふき、叔は太皷を好

みて各巧なりしとぞ。（裝劍奇賞、野口氏筆記）

梶川久次郎

久次郎は梶川彦兵衞の弟子にて、寛文天和のころ江戸中橋檜物町に住しとぞ。この人、當時印籠工古今第一の名人と稱せられき。故に其價甚だ貴し、その作重の裡に刑部梨地又は平目梨地ありてことに見事なりといふ。（裝劍奇賞）

尾形光琳

光琳實名は惟富、字の伊亮、號を方祝、道嵩、寂明、淵聲、堆翠、日受、谷鶴、長江軒、青々堂などいふ。東福門院御所呉服物御用商人、尾形主馬（實名は宗謙浩齋と號す木阿彌光悅に從ひて書法を學び別に一家をなせり）の子にして、通稱を雁金屋藤十郎と呼びしとぞ。其祖先は日向鹽田村の人にて、主馬の祖父道柏（通稱新三郎）の時、洛北北野天神社の傍にある尾形社に奉仕し、姓緒方の字を尾形に改めしといひ傳ふ。光琳いたく本阿彌光悅が蒔繪の法を好み、漆器中に鉛、錫、青貝などを嵌入し、頗る風流のものを製せしが、自から氣韻ありて一派を立てしかば、世人これを光琳蒔繪といふ。この人元來畫家にてはじめ畫を狩野養朴（常信）に學びしが、後俵屋宗達が等意をしたひて一家をなし、法橋に叙せらる。また茶事の良休宗佐に學び、巧に假山をも造りしとなん。光琳つねに洛陽の銀坐方、或は諸大名の出入、商人が催せる宴會には必ず招かれて衣服調度の意匠を授けしとぞ。當時洛陽の商人極めて奢侈に耽りしかば、宴會毎にその妻女の衣服をいくたびもきかへて互に新意匠を誇りけるが、同じ色のかさねにて七たび八たびも衣服をきかへ、其意匠の一たびごとにうちかはりて顯はれいでしは、光琳を賴みしものより外

にはなかりしとぞ。されば甲乙相競うて光琳を招き、ねもごろにその教をうけしもの多かりきとなん。或年例の銀坐方のものより誘はれて嵐山へ花見にゆくことありしが、かねてかゝる事もあらんとて貯へおきし竹皮に、にぎりめしとにしめとをつゝみて携へけるが、やがて其一行嵐山につきければ、何れも今を盛と金銀螺鈿を鏤めたる重の內をひらきて、誇り顏に示しゝかば、光琳こゝなりとおもひ竹皮のにぎりめしをひらけば、竹皮のうら一面に金箔を押し、山水花鳥などいとこまかにゑがきたるものなりしかば、奢侈に耽りたる銀坐方のものもあつけにとられ、これは〳〵とばかり驚きたりしとぞ。まもなく其筵も終りければ、その竹皮を風のまに〳〵大堰川へながして歸りぬ。その後日を經て或岸へその竹皮のつきけるを拾ひあげて町奉行所へ屆出たるものありければ、かねて銀坐方の奢侈に注意せられしをりとてこれ必定銀坐方のしわざならんと密々吟味を遂げられしに、銀坐方のものにあらざりしも銀坐方とつねに往來する光琳と極りしかば、以ての外の奢侈をなしたりとて追放を命ぜられたり。よりて家財をうり拂ひて江戸へ下りけりとなん。後赦されて再び洛陽へ歸りしといふ。享保元年丙申六月二日歿す。年五十九（或は七十ノとも云）洛陽小川頭妙顯寺中本行院に葬る。後文政二年十一月雨華齋抱一、ために一碑を建て、題して長江軒青々光琳墓といふ。（尾形氏系圖、古書傳芳、裝劍奇賞、書藝、尾形流略印譜、扶桑畫人傳、工藝遺芳、小林氏筆記）

尾形系圖

○伊義―緒方三郎―惟義又維美維能ニ依ル―日向鹽田村ノ人―ヲ豐後國トモ云

伊春 伊義七代ノ孫 通稱新三郎 足利義昭公ニ仕ヘ職祿五千石ヲ賜フ

道柏 通稱新三郎 洛北北野天神社ノ傍ニ尾形社アリ道柏其社ニ奉仕ス因テ姓字ヲ尾形ニ改ム

宗柏 通稱新二郎 東福門院御所奥服物御用ヲ務ム

宗謙 通稱主馬 號浩齋 父ニ嗣テ東福門院御所奥服物御用ヲ務ム 本阿彌光悦ニ就テ書法ヲヨクス

光琳 實名惟富 幼名市之丞 通稱藤十郎 享保元年六月二日歿年五十九

乾山 實名惟元 通稱權平 寛保三年六月二日歿年八十一

壽一郎 光琳ノ男 方濃 爲三京都銀座役人小西孟九郎養子ノ後改名曰三孟右衛門一

小川破笠

破笠は元伊勢の人、通稱を平助といひ、號に宗宇、笠翁、卯觀子、夢中菴などいふ。江戸に來りて俳諧をなし、傍ら土佐畫をよくし、且髹漆の術に長ぜり。はじめ俳諧を露言に學びしが、後蕉門に入りて其蘊奥を極めしとぞ。常に飄々四方に遊び、居所を定むることなし。或年木曾山中にさまよひ、露宿して衣服悉く破れ、只身に一枚の弊衣をまとひ、竹の子笠をかぶりて徘徊せしが、その時自ら「乞食にもかくはなられぬ案山子かな」と吟じ、名を破笠と改めしとなん。それより江戸へ歴り、晋子のもとに寄寓すること久しかりしといふ。この人光琳の法にならひ、更に新意をいだし、漆器中へ陶器、鉛、錫、角、堆朱などを嵌入し、其製甚だ雅致ありしかば、時人これを破笠細工と稱してもてはやしゝとぞ。延亨四年六月三日歿す。年八十五。弟子望月半山二世破笠と稱し、其業をつぎしといふ。俳家奇人傳、裝劍奇賞、古書備考、扶桑畫人傳

破笠系圖

- 笠翁
  - 半山（門人） 福井町ニ住ス大樹ノ梅ノ木ノ半山ト云 笠翁二世
  - 伊平次（門人）
  - 酒井巨山 酒井屋兵衛 蓑笠又笠窓ト號ス 笠翁三世 伊勢町道淨橋際ノ竹皮屋ナリ

佐々木信好

越中の國城端（ジヤウガハナ）の漆畫は、慶長のころ畑次五右衛門好永といふもの、肥前の國長崎に遊びて支那人より其法をうけしものなりといふ。次五右衛門の城端に歸るや、五彩の色漆をもて種々の器翫を塗

りしが、其後その法を子宣安に傳へき。さるを宣安承應三年醫師となりて、其法を佐々木德右衛門信好に傳へたり。信好はそのさき越前朝倉家の臣佐々木入道祐玄より出づ、祐玄一時落魄して本願寺の徒とさまよひしが、つひに越中の國礪波郡梅原に來り住せり。四代の孫佐々木又太郎之綱の時、天正元年城端に移り、漆工となりぬ。土人塗師屋又兵衛と稱す。これ信好の祖父なり。（工藝志料には畑次五右衛門を裕玄の孫となり恐らくは佐々木家の系圖と混じたるものならむか）信好元來畫をよくせしかば、漆畫も亦雅致ありて名作多かりきとぞ。世にこれを越中城端の白漆塗といふ。其實は密陀僧を用ゐるなり。信好元祿十二年正月五日、年八十二にて歿す。法名を圓照といふ。信好また其法を小原理右衛門亮好に傳ふ。これより小原家其業を世襲して維新の際に至れり。

城端漆畫系圖

○畑次五右衛門好永 ―― 越中國礪波郡城端ノ人
- 宣安 ―― 好永ノ子　承應三年佐々木信好ニ樣法ヲ傳ヘテ醫師トナリ櫻井定安ト稱ス
- 佐々木德左衛門信好 ―― 佐々木又太郎之綱ノ孫　元保十二年正月五日歿年八十二
- 小原理右衛門亮好 ―― 享保四年十月八日歿
- 小原孫右衛門貞好 ―― 雲山軒　元文元年八月十一日歿
- 小原治五右衛門忠好 ―― 明和八年十月七日歿年六十八
- 小原治五右衛門林好 ―― 實ハ齋藤近良ノ弟　文化二年九月十三日歿年七十七
- 小原治五右衛門宗好 ―― 實曆十四年生

古滿休意

休意は江戸の人、寛永十三年德川家光に召されて蒔繪師となる。これ古滿（コマ）家の元祖にて、寛文三年九月廿九日歿す。其子久藏安亘休伯と號す、また天和元年德川綱吉に召されて蒔繪師となり、父休意の職をつぐ、ことに元祿十六年九月麴町四丁目に百貳十坪の屋敷地を賜ふ。正德五年八月十日歿す。これより代々江戸將軍家の蒔繪師となれりとぞ。（古滿家系圖　裝劍奇賞）

古滿寛哉

寛哉は元坂内重兵衛と稱し、古滿亘柳齋の門人なりしが、はやくより出藍の譽ありしかば、師家より古滿の姓をゆるされぬ。これより古滿寛哉と號せしが、老後坦叟また坦哉とも號せしよし、こ

の人職業の餘暇好みて狂歌をよみ、眞砂菴道守といひけりとぞ。是眞所藏の扇面に「とけてより淺茅がしたのわすれ水ふと見付たる春のさわらび」とあり、これにて其一班を窺ふべし。天保六年四月九日歿す。其門より近世の名工柴田是眞をいだしつ。古滿家系圖追加、川崎千虎筆記

古滿系圖

- ○初代 古滿休意 ― 德川家光公ニ召レ寛永十三年十二月廿一日抱蒔繪師トナル 寛文三年九月廿九日歿
- 三代 久藏 ― 安巨後改ニ休伯ニ江戸中橋ニ住シ又鎭屋新道ニ住ス綱吉公代天和元年十二月父休意跡職仰付ラル 正德五年八月十日歿
- 三代 久藏 ― 後改ニ休伯ニ 家禮公代正德五年十二月父休伯跡職仰付ラル 享保十七年正月廿九日歿
- 四代 久藏 ― 家重公代寶曆四年十一月十八日父休伯跡職仰付ラル 寶曆八年十月三日歿
- 五代 久藏 ― 後改ニ休伯ニ家治公寶曆十二年四月五日父久藏跡職仰付ラル 安永六年六月廿六日歿
- 六代 勘助 ― 家治公代天明二年十二月久藏男子無ニ之ニ付養子仰付ラル 寛政七年八月廿九日歿

- 七代 六右衛門 ― 家齊公代寛政七年十月廿八日父勘助跡職仰付ラル 享和三年七月十三日歿
- 八代 久藏 ― 初清左衛門 後改ニ休意ニ家齊公代享和三年五月廿四日父六右衛門跡職仰付ラル 文化十三年八月十三日歿
- 九代 源藏 ― 後改ニ源蟲ニ家齊公代文化十二年四月廿二日養父久藏跡職仰付ラル 天保十三年二月二日歿
- 十代 清兵衛 ― 家慶公代天保十一年十月朔日養父源蟲跡職仰付ラル 安政五年六月十九日歿
- 十一代 清兵衛 ― 弘化四年三月四日父清兵衛跡職仰付ラル
- 門人 古滿巨柳 ― 古滿休伯ノ門人ニシテ頗ル良工ノ名アリ師家ヨリ古滿ノ姓ヲ免サレテ後古滿巨柳齋ト號ヲ切ル安永天明ノ頃ナリ又好テ機械人形ヲ造リシト云
- 古滿寛哉 ― 坂内重兵衛後號ニ坦叟又坦哉ニ古滿巨柳ノ門人ニシテ師家ヨリ古滿ノ姓ヲ免サル業傾狂歌ヲヨム 天保六月九日歿
- 長男 寛哉 ― 坂内重兵衛 寛政四年十月二日歿

三子
文哉 坂内敍十郎 書ヲ谷文晁ニ學ブ

門人
大村玉山 筆ヲ以テ牧侯ニ仕フ寛政享和ノ頃

野村休甫 源三郎又ハ甫ニ作ル 印籠師野村九圭ノ家ヲ繼ギ野村ト稱ス寛政享和ノ頃

鹽見政誠

鹽見政誠は通稱を小兵衞といふ。享保中京師に住せし蒔繪師にて精巧纖麗なる蒔繪に得意なりしのみならず、まゝ瀟洒風雅の品をもつくりしとなん。この人元來磨出し蒔繪を以て世にきこえし名工なりしかば、後世磨出し蒔繪を鹽見蒔繪と稱するにいたれり。其子孫江戸へ移り、四谷あたりに住して近年まで漆繪をなしゝとぞ。裝劍奇賞、蒔繪大全、工藝遺芳

谷田忠兵衞

谷田忠兵衞は江戸の漆工にて寶曆明和の際、一種の漆畫を仕出だして蜂須賀侯重喜に召抱へられたるものなるが、其法朱漆の上へ白黃茶朽黃等の色漆を以て山水人物草木花卉鳥獸などをゑがけり。其畫風光琳に似たり。これを阿波の人谷田蒔繪と稱するより其法を子孫にさへ傳へざりし故、一代にして亡びしかば、其製作品極めて世に稀なりとぞ。小杉氏筆記

飯塚桃葉

桃葉通稱は源六、後號を觀松齋といふ。印籠の蒔繪師にて有名なりしが、明和のころなりとかや、阿州侯重喜より代料は望に任せ遣はすべければ、下駄に蒔繪せよとて誂へられしに、桃葉いたく其禮なきを怒り、假令大名なりとも蒔繪は下駄にすべきものにあらず、ましてわが蒔繪は印籠にすることなれば、何程の黃金給はるとも、その義には應じがたしとて斷り申しゝかば、侯その氣節に感ぜられ、一年あまり過ぎて後人して三人扶持に六石をあたへ、士分にして召抱へんとて申遣はされしに、この度は桃葉も侯が禮を以て遇せらるゝことを喜び、早速承諾をなしてこれより江戸檜物町阿州侯別邸内に住せしといふ。其子孫代々阿州侯に仕へ、觀松齋の號を襲用しけりとぞ。裝劍奇賞、古書雜考、小杉氏筆記

原羊遊齋

羊遊齋は通稱を久米次郎といひ、號を更山といふ。文化文政の頃、江戸神田に住し、當時比類なき蒔繪の名工なりしが、其傳詳ならず。弘化二年十二月二十五日歿す、門人中山胡民その衣鉢をうけ、古滿寛哉の門人柴田是眞と其名を齊しうせしといふ。中山胡民未亡人談話

中山胡民

胡民は武藏國葛飾郡寺島村の人、中山金左衞門の子にして、通稱を祐吉といふ。幼年の時江戸へいでゝ原羊遊齋の門人となり、ことに精巧緻密なる蒔繪をよくし、はやくも其名を人にしられき。後法橋に叙せられ、泉々と號したりしとぞ。胡民職業の餘暇茶事を嗜み、俳諧をよくせり。はじめ、兩國矢の倉に住せしが、明治二年今戸に移住し、明る年正月八日歿す。年六十三。向島法泉寺に葬らる。その門より小川松民いづ。孫江民其家をつぐ。中山胡民未亡人談話

小川松民

松民は江戸神田に住せし煙草入の金具師小川忠藏の子にして、通稱を繁次郎といふ。十六歳の時中山胡民の弟子となりて蒔繪を習ひしが、幸にして明治中興の御代に遭遇し、博物館の御用を蒙り、奈良正倉院の七絃琴（金銀を嵌入して平文にぬりたるもの）をはじめ、諸大名が家に秘藏せる、貴重の寶器を模造し、（松平直亮藏片輪車金溜地手箱、松平忠禮藏片輪車黑地螺鈿手箱、土井利興藏浮線綾紋金溜地手箱、帝國博物館藏散莚研出し蒔繪箱等の模造品は帝國博物館の常備品となり工藝美術部に陳列せられたれば就いて觀るべし）其技著く進歩し、つひに古物を模造することに妙を得たりき。その後内外博覽會へ出品して、褒賞をうけしもの少からざりしが、明治九年米國費府において開設せられたる萬國博覽會の如きは、自ら渡航してこの道の爲に力を盡しゝとぞ。其人となりに付きては非難なきにあらずと雖も、とにかく近世の名工といふべし。明治廿四年五月三十日淺草馬道の宅にて歿す。年四十五。（富永氏書記、中山胡民未亡人談話）

帝室技藝員 紫田是眞

是眞は其先越後の人、文化四年二月七日江戸兩國橋町に生る。幼名を龜太郎といふ。後順藏と改む。十一歳の時古滿寛哉の門に入りて蒔繪を習ひ、十六歳の時鈴木南嶺に從ひて畫を學びき。天保元年南嶺の書を携へ京師へ上り、岡本豐彦の門に入り畫を學ぶこと二年、この間賴山陽香川景樹などゝ交はり、大に見聞を廣めしが、或日東福寺塔頭三聖寺の什寶李龍眠の十六羅漢を見、筆力の精妙なるに感じ、塔司に請うて三幅を摸寫しぬ。それより長崎へものしけるついで、京師をいでゝまづ讃岐の象頭山へ渡らんとて、播磨の下津井に到り、熱病に罹りて一時京師へ戻り、ほどなく江戸へ歸りぬ。當時名を令哉と稱し、家を淺草上平右衞門町へ移し、對柳居と號したりき。蓋し柳原に

對するの意なりとぞ。天保七年二月再び京師へ上り、香川景樹にあひてこの度は專ら蒔繪の研究をなす旨告げたるに、景樹その篤志に感じ、書を與へて南都の好古家穗井田忠友の許へゆかしむ。忠友是眞を伴うて諸寺の什寶を見せ、つぶさに教へられしとぞ。是眞にとりてはこの行大に利益を得たりといふ。同じき年十月江戸に歸りぬ。其後安政元年三月の事とかや、淺草海禪寺の客僧橋本素淳來たりて三聖寺の客殿庫裡大破に及びしかば、修繕の爲什寶を悉く賣却するよし語りき。是眞より十六羅漢は如何にするかと問ひしに、何れ賣却すべきものならんといひしかば、直に書狀にて問合はされん事を請ひしに、間もなく三聖寺より賣却すべき旨の返事來たりぬ。當時是眞は老母及び妻の重病に罹り、身まかりたる後にて、剩へ幼兒を抱き居り、困難中なれども畫道熱心のあまり十六羅漢を得んものと思ひしかば、さま〴〵金の才覺をぞなしたりける。幸門人萬屋半兵衞其志を愍み、京師の知人へあてゝ爲換を振込みしかど、都合あしくて間に合はず、三聖寺より催促頻りなりければ、江戸にて現品と引換へになさん事を申しやり、三聖寺の役僧付添ひて安政二年駒込の勝林寺へつきぬ。其間に家作道具悉く賣却し、其外知己のものを賴みて屛風講といふもの二口をこしらへもらひしかど、猶金員不足せしかば、辻屋又兵衞其外二名のものに請うて借入れ、やう〳〵にして三聖寺の役僧松月軒光敬へ金貳百五拾兩と役僧の旅費金一枚とを渡し、十六羅漢を手に入れしといふ。この負債は文久三年まで九年の間に元利とを償却し、萬延元年八月九日小石川傳通院境内の大黑基にて福田行戒師を賴みて羅漢講式を行ひしとぞ。其後狩野勝川院この事をきゝしきりに所望して一覽せしが、まもなく藩州侯より人して元金の外は金千兩を菓子料として遣はす故にこなたへ讓渡しく

れとの懇望ありしも、かたく辭して諾せざりしといふ。この一事にて是眞の人となりを知るべし。明治三年中山胡民歿し、蒔繪の名工は唯是眞一人となりしかば、是眞に蒔繪をこふもの多くいでしと。つゞいて內外博覽會へ出品して、（明治六年墺國博覽會へ蒔繪額面を出品して進歩賞牌をうけ同じき九年米國博覽會へ蒔繪額面を出品して金銀賞牌二箇をうけ同じき廿三年內國勸業博覽會へ漆繪畫狀を出品して銅賞牌をうけまた同じき廿二年佛國博覽會へ蒔繪額面を出品して金銀賞牌、或は妙技一等賞牌などをうけしかば、其名いよ〳〵顯はれぬ。ことに主上御用の御鞭に蒔繪を施し、（菊花をまけり）明宮御殿御襖の繪（反哺の圖）幷に皇居御杉戸の繪（表濃彩燕子花裏淡彩鴛水禁の圖）を命ぜられ、遂に帝室技藝員に選ばれしが如きは、是眞が七十餘年間この道の爲に盡し〻面目とこそいふべけれ。また晩年紙帛に漆繪を施すことを工夫し、額面屏風襖等に用ゐらる。是眞元より蒔繪をよくせしも、其最も長技とする所は蒔繪にして、ことに靑海波は得意なりしとぞ。明治廿四年七月十三日歿す。年八十五。淺草今戸稱福寺に葬らる。是眞三子あり、令哉、眞哉、隆眞といふ。皆よく父の業をつげりといふ。（令哉筆記　泰眞談話）

帝室技藝員　池田泰眞

池田泰眞は江戸の人にて、文政八年七月五日生る。天保六年十一の時、柴田是眞の門に入り、二十五年間蒔繪及漆繪を學び、其業の成るや、安政六年三十六の時師よりゆるされて淺草榊町に一家を構へ、獨立自營せり。維新後第一回內國勸業博覽會に出品（紫式部の圖蒔繪匾額）せしより、內外の博覽會、美術展覽會等に出品して其名を博せられしかば、畏きあたりにてもこの人の技術をきこしめしけん、明治二十四年宮廷より御文庫、御料紙等、御文臺、御硯等に古今集の「ぬれとほす山路の菊の露の間にいつか千歲を我は經にけん」といふ歌の意を蒔繪せよと命ぜらる。書は三條內府圖は川端玉章にして、泰眞畢生の技術を施し、三年の星霜を經て廿七年に至り、全部竣工せしといふ。これ泰眞が一代の製作品にして、謙讓なる泰眞もこの品ばかりは後世に傳へて恥ぢずといひしとぞ。泰眞はもとより技術研鑽の外に餘念なかりしも、第三回內國勸業博覽會に審査官となりし以來、日本漆工會の商議員、美術展覽會の審査員、臨時博會覽事務局の鑑査官等となりてこの道の爲に力を盡し〻ことも少からざりき。是眞の歿後は泰眞の名ことに顯れしかば、ひつに廿九年六月三十日帝室技藝員に擧げらる。時に年七十二なり。これよりさき東京美術學校に漆工科をおかる〻や、時の學長岡倉覺三氏人を介して泰眞を招かれしも、かたく辭してつかず、余は一箇の蒔繪師のみ、いかでか人に授くる才學あらん、又これを敎ふる術を知らず、さりながら余の業を職として學ばんとする者は余が工場に入るを拒まずと。岡倉氏これをきゝてしふること能はざりき。又泰眞の甥某縮緬問屋を營みていと榮えしが、一とせ商機を誤り、商品家財までも擧げて織元の手に渡し、せんすべなかりしかは、一日伯父なる泰眞の許に至り其前後の策を謀りしかど、泰眞もとより商機に通せず、策の施すべきなし。唯これを愍むのみなりしが、しばらくして膝をうつて曰く、老後不測の用意として匣底に千金を藏せしことを思ひ起す、これにて汝を救ふべしとてその金をとり出して與へらる。汝貧窮せしもこの金を藏せしことは妻女にも告げざりしといふ。これらの逸事についても其人となりを察すべし。晩年に至り病に罹りて鎌倉逗子の間に療養せし時も、つねに貝海草の類を寫生して蒔繪の料に供せられ、片時も其職を忘れざりきとぞ。三十六年三月七日、日本橋の藥研堀の宅において歿す。年七十九。淺艸今戸の稱福寺に葬る。下總幕張の人、某の女を娶り、一女を生む。先師是眞の

二子眞哉を迎へてこれに配し、孫女をあげしが、故ありて眞哉柴田家に復籍せしかば、孫女に門人平山泉哉を配し、家業をつがしむ。池田慶眞、梅澤隆眞（是邊末子）矢田雪眞、前山光眞、室築幸哉、高井泰令の徒皆泰眞の衣鉢をうけて蒔繪に漆書をよくせり。（松翁筆記圖按）

法印康圓

康圓は康運の子（或はいふ湛慶の甥なりと）にして、東寺佛師職に補せられ、但馬法印と號す、鎌倉に下り宋人陳和卿が携へ來たりし紅花綠葉によりて、法華堂の佛具を彫刻せしとぞ。これ鎌倉彫の權輿にして其法を康譽（康勝の子）宗阿彌淨阿彌に相傳へしといふ。（佛大師系圖）

楊成長是

楊成長是は堆朱の名人にて、天和三年時の將軍德川綱吉に召抱へられ、ことに寶永五年五月麴町十三丁目において八十八坪の屋敷地を賜りしとぞ。この人享保四年まで、三十七年間將軍家に仕へ、その年四月二十七日歿す。これより子孫代々將軍家の堆朱師となれり。楊成を氏とせしことは唐山堆朱の名工張成及楊藤の一字づゝをとりてつけしものなりといふ。（楊成系圖）

堆朱家系圖

- ○楊成長是　天和三年將軍ニ召從ヘラル　寶永五年麴町十三丁目ニテ八十八坪ノ屋敷地ヲ賜フ　享保四年四月二十七日歿
  - 楊成長盛　享保二年九月晦日歿

- 楊成長韻　明和二年五月二十二日歿
- 楊成長利　安永八年二月四日歿
- 楊成均長　コノ人堆朱古物ノ鑑定ニ長ス〔補〕　寛政三年六月二十三日歿
- 楊成長蔭　文化九年二月二日歿
- 楊成長英　文政三年大我鑑ニ御書員堆朱彫物師神田小柳町四丁目堆朱楊成トアリ〔補〕　嘉永元年十一月八日歿
- 楊成長邦　老後剃髮シテ淨友ト號ス　安政五年八月十一日歿
- 楊成國平　文久元年三月日光修繕被命同三年十月本町三丁目ニテ百七十坪ノ屋敷地ヲ賜フ　明治十三年三月八日歿
- 楊成經長　明治二十八年五月ヨリ美術育英會ノ扶助ヲウケテ家業ヲ研究中同三十九年十一月歿

楊成豐五郎 明治十三年生 經長ノ弟國平ノ二子ナリ

玉楮象谷

象谷は讃岐高松の鞘塗師藤川理左衛門（周南と號す）の子にして、通稱を敬造といふ。父に從ひて鞘塗を修業する傍ら、好みて彫刻をなし、京師の貫名海屋、永樂保全、僧雲華、浪華の篠崎小竹讃岐の宮本敬哉、阿部絹洲等と風月の交を結びしが、ことに保全敬哉とは最も魂あへる友なりき。中年に及びて專ら意を漆器彫刻に注ぎ、これを學ぶこと數年、遂に其蘊奥を極め、唐山の張成、存清の遺風に據り、本邦古代の製に基き、一種の髹法を發明せり。其法たるや竹籃或は木材を質として緻密なる花卉草木等の模樣を彫り、青黄紅等異色の漆を以て其彫付けたる模樣を塡め、一層其光彩を鮮明ならしむるものなり。また堆黒はこの人の最も得意とする所なりき。これ等の技術は天才の然らしむる所にて、名聲忽ち四方に傳播し、つてをもとめて製造をこふもの枚擧に遑あらず、文政十三年十月初めて藩主松平頼恕に仕へ、それより頼胤頼聰二代に仕へて藩主の爲に製せしもの凡三百餘箇に達せり。其功を以て藩主より扶持與へて帶刀をゆるされ、玉楮（ヲカ）の姓をも授けられしとなん、嘉永年間亞米利加の軍艦某號讃岐寒川郡志度浦に來船せし時、象谷大盆一個を贈りしに艦長大に感賞して厚く謝したりとぞ。明治二年二月歿す。年六十四。弘舜造（文綺堂と號す）子爲造その遺法をうけて今猶從事しけりとなん。（文綺堂雜記）

織物工染物工

滿田彌三右衛門

彌三右衛門は筑前國冷泉津の人にて、常に織物業の振はざるを嘆き、いかにもして宋へ渡り、研究せばやとおもひしも、其機會なくして空しく歳月を經過せしが、偶東福寺の僧辨圓（聖一國師）が入宋せんとて冷津へ來たりしかば、其志を告げ、嘉禎元年四月宋人の商船に乘りて同行し、彼邦の明州に入り、辨圓は景福津院にて禪學を修め、彌三右衛門に其近傍にて織物、朱燒、箔燒、素麵、麝香丸の法を傳習し、仁治二年五月朔日明州定海縣を發し、海上颶風に逢ひて高麗の耽沒羅阿私山に漂着し、辛うじて其年七月二十一日冷泉津に歸りぬ。これより彌三右衛門傳習せし所の廣東織、純子織、綾羽織、雪下織、竹下織などの貴品を織りて其法を廣めしが、一日其綵紋の新しきものなきを憂へ、これを辨圓に謀りしに、辨圓坐右にありし獨鈷と華皿とを形容して紋樣となし、これを示しゝかば、それによりて獨鈷うけ織、華うけ織り出だしぬ。其後幾ばくならずして彌三右衛門の名四方に傳播し、諸國より來たりて其業をうけしとぞ。彌三右衛門永遠不朽の利益を博多の地にのこし、弘安五年八月廿五日歿す。博多の聖福寺に葬らる。（聖一國師年譜、石城志、博多古蹟拾遺、大藤氏舊記）

竹若伊右衛門

伊右藏門はじめ藤兵衛と稱す、筑前博多の人にて、滿田彌三右衛門の遠孫彦三郎（彦三郎は明に航し織物の業を傳習して廣東織竹下織を再興せし人）の弟子となり、廣東織雪下織竹下織などを織りなしゝが、其後いろ〳〵工夫を凝

らし、遂に一種の織物を發明せり。其地質琥珀織に似て甚だ厚く其模樣浮線文にして柳條あり、時人これを博多織といふ。伊右衞門女ありて男なし。肥前國養父郡勝尾山の城主筑紫上野之助廣門の末弟鬼松を養ひて子とす、鬼松後名を惣右衞門常房と稱し、忠太夫重利を生む。重利後伊右衞門と稱す、父子共に勉勵して益々織物業を擴張せしが、ことに忠太夫最も其術に精しくして大に博多織の面目を改めしとぞ。文祿元年豐太閤の征韓軍を起し、博多に來たらるゝや、天下泰平云々の文字を織込みたる下緒を献じ、ことの外太閤の感賞をうけしといふ。其後慶長五年黑田長政筑前入國の時博多織を献じ、頗る長政の意に適ひ、黑田家軍旗織立を命ぜられ、其織物師となりぬ。これより代々黑田家に仕へしとなん。慶長十七年十月十七日歿す。聖福寺塔頭節信院に葬らる。石城志、博多古記拾遺、大熊氏筆記

竹田庄九郎

庄九郎は尾張愛知郡有松村の人、慶長中木綿に纈纈を施すことを工夫せしが、偶德川義直の封を尾張にうけ入國せらるゝや、庄九郎いでゝ迎へ、木綿絞の采轡を献ず、義直其美麗なるを賞し、やがて宅地を與へられぬ。子孫代々その業を繼ぎ地名をとりて有松絞といふ、後この業をなすもの數十戸に及び、屋舍相接し紅白青綠粲爛として美を競ふものに似たり。こゝにおいて鷄林中山などの使者この驛を過ぐる毎に車を駐めて詩句を寄せしとぞ。我邦纈纈の業既に寧樂朝の時盛に行はれしかど、木綿に纈纈を施したるは庄九郎に始まれりといふ。尾張名所圖會、尾張志

友禪

友禪は氏名ともに詳ならず、京師の人なり、かつて東山に住し、祇園の社頭にいでゝ扇面を畫き、往來の人に鬻ぎけるといへり。後遂に一家の染物を工夫し、友禪染とて時人にもてはやされしとぞ。この人元來畫を巧にして妙手なりしかば、往々絹本に染物繪を寫したるものあるが、其精密なること他人の及ぶ所にあらず、蓋し寶永中の人なり。本朝畫纂、古畫備考、近世逸人畫史、薔薇の花、嬉遊笑覽、扶桑畫人傳

明石次郎

堀次郎實名は將俊、播磨國明石の人なり。故ありて寛文中家族を率ゐて越後國小千谷に移住し、明石次郎と改稱す、次郎機織染色の術に通ぜしかば、從來產出の白布を改良し、織布にしぼを加へて所謂縮布となし、且縞、絣、花紋を織込み、文彩を顯すことを工夫して里人に其法を傳へしかば、魚沼全部より延いて東頸城、刈羽、三島の諸郡に至るまで路の遠近を問はず、陸續來集して其教を受けしとぞ。こゝにおいて縮布の產額頓に增加し、小千谷、十日町、堀內の三市場を開き、諸國の商店常に輻湊して越後縮布の名忽天下にしらる。次郎延寶七年九月二日歿す。小千谷眞宗極樂寺に葬らる。二女あり長を千代といひ、次を袈裟といふ。共に父を助けて從事せしが、次郎の歿後は長女千代家を繼ぎ、夫を迎へしかど子なくしてつひに明石の家系絕えたり。されども次女袈裟小千谷の作兵衞といふものに嫁し、其家連綿として今なほ保存せり。次郎の以後門人其德を慕うて一小祠を極樂寺境內の東南隅に建立し、これを明石堂と號す、後寛政九年十月傍に肇功碑をもたてたり。さはいへ其後祠堂大に荒廢せしかば、弘化五年縮布營業者より資金を募り、槻材を用ゐ、二間二尺四方高さ三丈の祠堂を再建し、彫鏤彩畫を施し、實に壯嚴美麗を極めたり。每歲五九の兩月に

祭典を行ひ、明石次郎の靈魂を慰むることなりとぞ。祭典は小千谷町縮布商にてこれを掌り、當日は近郷より男女雲集して頗る盛なりといふ。肇功碑文

天野房義

天野房義は西本願寺の家來にて、初通稱を儀助といひしが、後作十郎と改めたり。この人文政年間阿波公方足利の家來生駒兵部とともに綴綿（ツヽレニシキ）を織りて生計の助となしゝが、その精巧なることは綴綿の中興といはれし紋屋次郎兵衛にもおとらざる手際なりしとぞ。房義の手製にて有名なるは西本願寺の兆殿司筆五帝の圖を下繪として織りいだしたるもの、（この綴綿は紋屋と俱に織りしといふ）幷に松尾神社稲荷神社御興の胴卷に貫名苞のかきし神號を織りいだしたるものなり。（つゞれ錦一名天竺織といふ糸織毛織木綿織の三種あり元來和蘭船來品にて毛織多し高麗寺に傳ふる秀吉公陣羽織の如きは糸織の上等物なり毛織の最上等とも稱すべきは祇園會鶏鉾の見送りにて有名なる品なり角倉與一の商船寛永年間交趾にて得たるものなりとぞ我邦にてこの製を模したるは安永年間の事にて今其模造せし人の姓名を傳へざるはいかにも遺憾のことなり天明以來この織物は堂上方宮門跡の家來にて營みこの織業を專らになしたるものなし其織方は全く佛蘭西製のコブロンに異らずといへり）房義の門下にてこの技をよくせし弟彌助其妻おもん幷に山科屋清助（弘化の頃四天王寺の櫻門において此織方を縦覧せしめし人なり）なりき。ことにおもんが織いだしゝ藤森神社の紫地錦の鎧直垂は最も有名のものなりとぞ。綴綿織考、小林氏筆記

石田九野

九野名は星、字は日生、號を九野といふ。通稱はじめは恒造、後九野に改む。上野國山田郡桐生の人、年わかき時資産を喪ひしより、其畫をよくするを以てつひに紋屋となりぬ。其後數年刻苦勉勵して資産をつくり、家やゝ豐になりしかば、蝦夷に赴き商業を起すべき大志を抱きあまたの貨物を積みこみて出帆せしが、中途颶風に遇ひて貨物を悉く海底に沈め、僅に身をもて免れたり。これ

より世事にあづからず、髪をおろして僧となり、某寺に退隱せり。されども朋友親屬其志を愍み、ふたゝび花本（モノ）をつくりて機業家を利せよと勸めしかば、しばらく其意に從ひしが、まもなく幕府蝦夷地開拓の事に力をいだし、渡海を勸むるよしをきゝ、九野大に喜び函館に機業場を建つることを願ひ出し、其允准を得て準備も整ひしに、病に罹り、文久元年十月十二日年五十五にて歿す。九野の時盛なるや巨宅を構へ、其中に數百歩の園池を造り、鯉魚を放ちて樂みしとぞ。又書畫を好み貯ふる所少からざりき。されども其書畫をみて羨望するときは、直に其人に與へて毫も惜むことなかりきといふ。又天性漂遊を好み、少しく暇あれば一家を携へて名山舊跡をさぐりしかば、天下に知已多く、遠來の客常に絶えず、九野の名聞の東西にしらる。九野の花本をつくるや、きはめて意匠を凝し、古代の服章器翫の花文より、己が眼にふるゝ所の山水、花鳥、煙雲の形容をとりて其材料に供せしかば、其意匠いつも斬新にして、つひに桐生の紋織物をして西陣と殆ど伯仲するに至らしめたり。されば機業家爭ひて九野の花本を求め、一年に四五百金の報酬を得しといふ。上毛雜錄

藤本庄左衛門

藤本庄左衛門は泉州堺車町の糸物商なりしが、天保二年五月、相良段通支那製敷物などに倣ひ、己が工夫をさづけて同所絹屋町に住せし泉利兵衛といふものに織らしめしに、全く己が思ふ如くに出來せしかば、堺段通と稱して販賣することゝなりぬ。これを手編込段通の始なりとす、庄左衛門嘉永五年某月歿す、其子長治郎その業を繼ぎ、庄左衛門と改稱せしが、幾ばくならずして安政五年歿し、つゞきて織工泉利兵衛も亦歿せしかば、一時この業衰へたれども、庄左衛門長男庄太郎家を

つぎ、支配人萬兵藏の後見にて、なほ段通を販賣せしとぞ。其後文久三年播州住吉の人、星野卯兵衞、稲葉善兵衞兩人元西陣の織工にて、大坂天滿に住せし久七氏不詳といふものより、天鵞絨織法にならひて一種の段通織法を教授せられて、いろ〳〵と工夫を費し、遂にこの年三月僅に一帖十二枚を織出だし、堺材木町村田孝平に販賣方を托せり。これ摺込段通のはじめにて、庄太郎の店にてもこの摺込段通を販賣せしとぞ。庄太郎長ずるに及びて、明治十一年頃より貿易商人に托して米佛諸國へ輸出し、頓に需要を增加せしかば、從て技術も著く進歩し、今日にては堺の一大物産となり、段通業者七十三名。工場七十五所、職工千四百餘人一年の金額十二萬圓に達せり。庄左衞門創始の功も亦偉なるかな。（成瀨氏筆記　高島氏筆記）

帶室技藝員　伊達彌助

彌助は幼名を德松といひ、京都堀川天神北町の人にて、世々綸子を織りて業とせしといふ。壯年に及びて父の名をつぎ彌助と改めしとぞ。彌助畫法及舍密術を辻某に學び、古代の繪畫彫刻類をあつめて織物の參考に供し、器械によらずして專ら手工を用ゐ、好みて古製の華紋を模せしが、後つひに伊達錦織を發明せり。奇文隱映光采沈鬱古色あるによれりとぞ。また藕絲をもて觀音四十餘體を織りいだしゝが、其精巧なること繪畫と毫も異らざりき。この觀音にやがて大隈伯の北堂せちにこひもとめられて、關東の諸名刹に納められしといふ。また第三回內國勸業博覽會へ女帶地紋樣漢東盡しを出品して一等妙技賞を得られしは、この道の名譽にぞありける。明治廿三年名古屋行宮へ召されて御宴を賜ひ、尋で帝室技藝員を命ぜられぬ。第三回內國勸業博覽會及京都市工業物產會の

審査官となり、又臨時全國寶物取調局の御用係となりて皆よく其職をつくし、益々世に用ゐられしに、明治廿五年三月廿日五十四にて歿しぬ。これよりさき京都の近國水災に罹り、西陣の織業一時振はざりしかば、彌助ことに工場をたてゝ衆工を救ひしより、人その工場を呼て救助機（スクヒバタ）と稱せしとなん。彌助の歿するや西陣の織工其門に集り、日夜慟哭するもの絕えざりしとぞ。ことに西陣の人相謀り、彌助の爲に一碑を洛北平野橋東畔にたて、題して西陣名伎碑といふ。（西陣名伎碑　小林氏筆記）

工藝鏡卷二終

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月三日發行

改造文庫　第一部第二十六篇
日本工業史　定價四十錢

著者　横井時冬
發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四ノ六
印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一二二一番至一二二四番

株式會社秀英舍印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國内を震憾し、日日數千通の感謝狀が舞ゐ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して玆に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、内容の嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。

□此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。

□此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。

□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢とし、その冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす、但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。

□表紙意匠中、1.は十錢、2.は二十錢を、3.は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇 富國論(上卷) アダム・スミス著 (刊近)
第二篇 富國論(中卷) アダム・スミス著 (刊近)
第三篇 富國論(下卷) アダム・スミス著 (刊近)
第四篇 人口論 ロバート・マルサス著 (刊近)
第五篇 經濟學原理 デヰト・リカアド著 (刊近)
第六篇 經濟學原理(上卷) スチュアド・ミル著 (刊近)
第七篇 經濟學原理(下卷) スチュアド・ミル著 (刊近)
第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著 (刊近)
第九篇 經濟學原理 チェボンス著 (刊近)
第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 1
第一一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
第一二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 2
第一三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 1
第一四篇 神と國家 バクーニン著 本莊可宗譯 1
第一五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
第一六篇 古代社會(上卷) モルガン著 (刊近)
第一七篇 古代社會(下卷) モルガン著 (刊近)
第一八篇 エミール(上卷) ルーソウ著 內山賢次譯 4
第一九篇 エミール(下卷) ルーソウ著 內山賢次譯 4
第二〇篇 國家論 オッペンハイマー著 廣島定吉譯 2
第二一篇 金融資本論 猪俣津南雄著 4
第二二篇 日本開化小史 田口卯吉著 2
第二三篇 日本經濟論 田口卯吉著 1
第二四篇 日本經濟學說要領 經濟的帝國論 龜本誠一著 (刊近)
第二五篇 日本商業史 横井時冬著 4
第二六篇 日本工業史 横井時冬著 4
第二七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2
第二八篇 リッケルト論文集 リッケルト著 2
第二九篇 フッサール論文集 フッサール著 (刊近)
第三〇篇 女工哀史 細井和喜藏著 4
第三一篇 婦人解放論 スチュアド・ミル著 (刊近)
第三二篇 社會進化と婦人の地位 ラッツベルト著 山川菊榮譯 2
第三三篇 共產主義小兒病 レーニン著 (刊近)
第三四篇 二十世紀初頭の農村問題 レーニン著 (刊近)
第三五篇 文學と革命 トロツキイ著 (刊近)
第三六篇 幸德秋水集 幸德秋水著 (刊近)
第三七篇 中江兆民集 中江兆民著 2
第三八篇 財產起源論 レヴィンスキー著 貴島克己譯 1

第三九篇 組織論 レーニン著 鈴木厚譯（刊近）

改造文庫第二部目錄

第一篇 古事記 澤潟久孝校訂（刊近）
第二篇 萬葉集（上卷） 折口信夫校訂（刊近）
第三篇 萬葉集（下卷） 折口信夫校訂（刊近）
第四篇 古今集 吉澤義則校註（刊近）
第五篇 新古今集 吉澤義則校註（刊近）
第六篇 新編源氏物語（上卷） 折口信夫校註（刊近）
第七篇 新編源氏物語（下卷） 折口信夫校註（刊近）
第八篇 枕草紙 山岸德平校訂（刊近）
第九篇 金槐集 幸田露伴校註（刊近）
第一〇篇 平家物語（刊近）
第一一篇 雨月物語 山口剛校訂（刊近）
第一二篇 山家集 齋藤茂吉校註（刊近）
第一三篇 俳諧七部集 萩原羅月校訂 3
第一四篇 蕪村七部集 萩原羅月校訂（刊近）
第一五篇 伊勢物語 久松潛一校訂（刊近）
第一六篇 神皇正統記 宮地直一校訂（刊近）
第一七篇 奥の細道 芭蕉翁文集 萩原羅月校訂 3
第一八篇 曾根崎心中 女殺油地獄 黑木勘藏校註（刊近）
第一九篇 心中天島宴 冥途飛脚 黑木勘藏校註（刊近）
第二〇篇 國姓爺合戰 黑木勘藏校註（刊近）
第二一篇 槍權三重帷子 夕霧阿波鳴門 黑木勘藏校註（刊近）
第二二篇 心中重井筒 丹波與作 黑木勘藏校註（刊近）
第二三篇 山崎與次兵衛壽門松、心中宵庚申 黑木勘藏校註（刊近）
第二四篇 傾城反魂香 黑木勘藏校註（刊近）
第二五篇 淀鯉出世瀧德 長町女腹切 黑木勘藏校註（刊近）
第二六篇 堀川波鼓 博多小女郎波枕 黑木勘藏校註（刊近）
第二七篇 五十年忌歌念佛 大經師昔暦 黑木勘藏校註（刊近）
第二八篇 菅原傳授手習鑑 假名手本忠臣藏 黑木勘藏校註（刊近）
第二九篇 八百屋お七歌祭文 お染久松袂の白絞り 黑木勘藏校註（刊近）
第三〇篇 伊賀越道中双六 一谷嫩軍記 黑木勘藏校註（刊近）
第三一篇 大鏡 吉澤義則校註（刊近）
第三二篇 徒然草 吉澤義則校註（刊近）
第三三篇 日蓮上人集（刊近）
第三四篇 親鸞上人集（刊近）
第三五篇 北村透谷選集 島崎藤村編 1
第三六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著 1
第三七篇 平凡 二葉亭主人著 1

第三八篇 子規俳話 正岡子規著（刊近）
第三九篇 子規歌話 正岡子規著（刊近）
第四〇篇 坊つちやん 夏目漱石著 2
第四一篇 草枕 夏目漱石著 2
第四二篇 それから 夏目漱石著 3
第四三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著 2
第四四篇 我等の一團と彼と雲は天才である 石川啄木著 1
第四五篇 山陰土産その他 島崎藤村著 2
第四六篇 作曲白秋民謡集 北原白秋著 2
第四七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著（刊近）
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1
第四九篇 日輪 横光利一著 1
第五〇篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著 1
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2
第五二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 2
第五三篇 ホワイト・ファング 堺利彦譯 3
第五四篇 はやり唄 小杉天外著（刊近）

（以下續刊）

改造社圖書目錄

政治・法律・經濟・社會

書名	著譯者	定價	送料
離婚制度の研究	穗積重遠著	一〇・〇〇	八・三六
家族制度と婦人問題	河田嗣郎著	二・〇〇	・二〇
婚姻の基調	宮本英雄著	一・五〇	・一八
現代法律思想の研究	高柳賢三著	四・八〇	八・二七
小作法と自作農創定法	澤村康著	四・八〇	四・二七
訂正增補 普通選擧法要綱	飯内務部官 三宅前法書記官共著	・六〇	・一六
法と宗教と社會生活	田中耕太郎著	二・五〇	・二四
私法學序說	廣濱嘉雄著	三・〇〇	・二六
ソヴイエトロシアの民法と勞働法	末川博著	二・五〇	・二二
法窓閑話	末弘嚴太郎著	二・五〇	・二二
續 の効用	末弘嚴太郎著	二・六〇	・二二
法律に於ける階級鬪爭	平野義太郎著	二・五〇	・二六
法制講話	森莊三郎著	二・五〇	・二二
現代日本の政治過程	大山郁夫著	二・五〇	・二二
大衆に呼びかける	大山郁夫著	・二〇	・一四
勞働法總論	孫田秀春著	二・六〇	・二六
勞働政黨と勞働組合	ロノヴイエフ原著 宮土民馬譯	・九〇	・一四
勞働問題原理	渡邊一郎著	二・〇〇	・二二
農政四十三講	河田嗣郎著	二・五〇	・二二
農村問題と對策	河田嗣郎著	二・〇〇	・二〇
農業問題研究	河西太一郎著	二・三〇	・二二
土地問題論	W・リープクネヒト著 河西太一郎譯	一・五〇	・二二
農村法律問題	末弘嚴太郎著	二・五〇	・二二
農村研究講話	小野武夫著	一・五〇	・一八
日本農民史語彙	小野武夫著	三・五〇	・二四
近世農村問題史論	本庄榮治郎著	二・三〇	・二二
社會政策と階級鬪爭	福田徳三著	三・〇〇	・二四
社會運動と勞銀制度	福田徳三著	二・五〇	・二〇
ボルシエヴキズム研究	福田徳三著	二・九〇	・二二
レーニニズム	ニコライ・レーニン著 淺野晃・堺利彦譯	一・二〇	・一六
價値論と社會主義	小泉信三著	三・三〇	・三〇
改譯 資本論解說	カウツキー著 高畠素之譯	一・二〇	・一八
社會主義と進化論	高畠素之著	一・〇〇	・一八
社會主義社會學	アーサー・レウキス著 高畠素之譯	一・〇〇	・一六
マルキシズムと國家主義	高畠素之著	一・〇〇	・一八
資本主義末期の研究	高橋龜吉著	二・五〇	・二四
國家思想の研究	口田康信著	二・〇〇	・二〇

社會問題綱要	河田嗣郎著	四・五〇	四・二七
生存競爭の哲學	賀川豐彦著	二・〇〇	二・二三
文學と革命	トロツキー著 茂森唯士譯	二・〇〇	二・二〇
民衆の苦悶	佛國戰利カイヨー著 亀井貫一郎譯	一・三〇	一・一六
青年學徒に訴ふ	森戸辰男著	・三〇	・一四
學生と政治	森戸辰男著	・三五	・一四
思想と鬪爭	森戸辰男著	二・〇〇	・二〇
女工哀史	細井和喜藏著	二・〇〇	・二〇
石油帝國主義	ルイズ・ブイスシヤー著 笠畑寒村譯	一・五〇	・二〇
帝國主義研究	猪俣津南雄著	一・〇〇	・一八
封建社會統制と鬪爭	黒正巖著	三・五〇	・三〇
經濟學批判のために	福本和夫著	一・〇〇	・一八
唯物史觀のために	福本和夫著	一・〇〇	・一八
近世封建社會の研究	本庄榮治郎著	二・〇〇	・二二
日本社會史	本庄榮治郎著	二・五〇	・二四
日本財政史	本庄榮治郎著	二・五〇	・二四
唯物史觀	ブハーリン著 富士・横田譯	三・五〇	・二八
世界經濟論	ブハーリン著 富士辰馬譯	二・〇〇	・二二
日本殖民地經濟論	持地六三郎著	二・八〇	・二四

國際經濟總論	堀江歸一著	三・三〇	・二六
國際經濟と國民經濟	堀江歸一著	二・五〇	・二六
續國際經濟と國民經濟	堀江歸一著	二・五〇	・二二
貨幣・銀行・外國爲替（上）	堀江歸一著	三・〇〇	・二六
貨幣・銀行・外國爲替（下）	堀江歸一著	四・〇〇	・三〇
金貨本位制の興廢	堀江歸一著	一・〇〇	・一八
英國預金銀行論	堀江歸一著	一・〇〇	・一八
中世寺院法と經濟思想	山口正太郎著	一・五〇	・二〇
階級及第三史觀	高田保馬著	二・八〇	・二四
近世商業史	野村兼太郎著	三・〇〇	・二六
明治維新經濟史	猪谷善一著	二・五〇	・二六
經濟學原理（四冊）	マーシヤル原著	一・〇〇	・二四
唯物史觀（經濟史出立點）の再吟味	福田德三著	二・五〇	・二六
野田大勞働爭議	松岡駒吉著	一・〇〇	・一八
日本社會經濟編年史	吉田英雄著	八・〇〇	・二七
英國資本主義成立史	野村兼太郎著	四・五〇	・二七
大衆時代の解剖	室伏高信著	一・〇〇	・一六

哲學・宗教・科學

心理學講話	松本亦太郎著	三・五〇	・二四

智能心理學	松本亦太郎著	九・〇〇	八・三六
ヴントの民族心理學	桑田芳藏著	三・五〇	・二四
カントの平和論	朝永三十郎著	一・五〇	・一八
リツケルトの歴史哲學	米田庄太郎著	四・七〇	・二六
新カント派の歴史哲學	板垣鷹穂著	一・五〇	・一八
ジムメルの經濟哲學	恒藤恭著	三・〇〇	・二〇
ディルタイの哲學	勝部謙造著	二・〇〇	・二〇
生の哲學	リツケルト著 小川義章譯	二・八〇	・二四
藝術哲學	植田壽藏著	二・七〇	・二四
日本道德論	清原貞雄著	四・五〇	・三〇
現代教育哲學の根本問題	長田新著	三・〇〇	・二四
體驗宗教の研究	佐藤繁彦著	二・〇〇	・二〇
自我經	ステイルネル著 辻潤譯	二・八〇	・二二
物理學と認識	桑木彼雄著	一・五〇	・一八
學校兒童心理學	關寛之著	二・七〇	・二二
無產階級の哲學	ロセフ・ディツケン著 山川均譯	二・五〇	・二二
哲學思想の史的考察	ウンダーマン著 喜一譯	二・〇〇	・二二
先立ちて來るもの	ロマン・ローラン著 大澤譯	一・五〇	・一六
靈の王國	室伏高信著	一・五〇	・一八
考註切支丹鮮血遺書	松崎實編	三・五〇	・二八

文學

老子の研究	竹內義雄著	三・五〇	・二八
遺傳學概論	エムシー・コルボー著 長尾正人譯	一・八〇	・二〇
婦人の健康の爲に	樋口繁次著	一・〇〇	・一八
近代物理學概觀	佐藤・庄司共著	三・〇〇	・二四
電子說から見た世界	中澤臨川著	一・八〇	・一八
實踐哲學研究	錦田義富著	五・〇〇	・二七
經濟哲學	アルガヨフ著 鳥野三郎譯	二・五〇	・二四
苦悶の象徵	廚川白村著	一・八〇	・二〇
愛する人々へ	有島武郎著	三・〇〇	・二四
近代文明と藝術	吉江喬松著	二・〇〇	・二〇
文藝管見	里見弴著	一・二〇	・一六
學藝論鈔	阿部次郎著	二・二〇	・二〇
露國現代の思潮及文學	昇曙夢著	四・八〇	・三〇
近代の戀愛觀	廚川白村著	二・五〇	・二二
吉利支丹文學抄	村岡典嗣著	三・五〇	・二八
文學に志す人へ	武者小路實篤著	一・三〇	・一八
ロマンチク時代	太宰施門著	二・〇〇	・二〇
戀愛・價値論	石原純著	一・六〇	・一八

或る兵卒の記錄	細田民樹著	二・五〇	・二二
番町夜講	泉鏡花著	二・〇〇	・二〇
新選谷崎潤一郎集	谷崎潤一郎著	五・五〇	內・二七
愛すればこそ・愛なき人々	谷崎潤一郎著	一・〇〇	・一六
痴人の愛	谷崎潤一郎著	二・〇〇	・二二
鮫人	谷崎潤一郎著	二・〇〇	・二〇
赤い屋根	谷崎潤一郎著	二・〇〇	・二二
運命の秋	吉田絃二郎著	二・〇〇	・二〇
父	吉田絃二郎著	一・九〇	・二〇
ダビデと子たち	吉田絃二郎著	一・八〇	・二〇
芭蕉	吉田絃二郎著	一・六〇	・一八
一人歩む	吉田絃二郎著	一・八〇	・二二
森有禮	小山内薫著	一・三〇	・一八
秋の一夜	廣津和郎著	一・六〇	・一八
パンヤ文六の思案	岸田國士著	一・五〇	・一八
過ぎ行く日	德田秋聲著	一・八〇	・二二
義人ジミー	アプトン・シンクレア著 前田河廣一郎譯	二・〇〇	・二〇
海に生くる人々	葉山嘉樹著	一・五〇	・一八
春は馬車に乗って	横光利一著	一・八〇	・二〇
蛇精	田中貢太郎著	一・九〇	・二〇

鋼の上の少女	片岡鐵兵著	二・〇〇	・二二
江戸っ子の死	岡本綺堂著	一・八〇	・二〇
山科の記憶	志賀直哉著	一・五〇	・二〇
旅人	吉田絃二郎著	一・八〇	・二二
庭を造る人	室生犀星著	二・〇〇	・二二
恐ろしき私	中河與一著	一・八〇	・一八
何が彼女をそうさせたか？	藤森成吉著	一・二〇	・一八
空氣饅頭	オ・ロマーシヨフ著 [illegible]譯	一・二〇	・一八
劍俠受難	國枝史郎著	一・〇〇	・一六
木靴	久米正雄著	二・〇〇	・二二
生きて行く	廣津和郎著	一・五〇	・一八
大道無門	里見弴著	二・〇〇	・二二
死線を越えて（上卷）	賀川豐彦著	一・〇〇	・一八
死線を越えて（中卷）	賀川豐彦著	一・〇〇	・一八
死線を越えて（下卷）	賀川豐彦著	一・〇〇	・一八
[illegible]	眞山青果著	一・八〇	・二二
[illegible]・おらんだ人形	澁谷信三郎著	一・八〇	・一八
無限抱擁	瀧井孝作著	二・〇〇	・二二
母と子	武者小路實篤著	二・〇〇	・二二
西鄕と大久保	山本有三著	一・五〇	・一八

ゆかり	觀佛文學會編	普六・〇〇 上三・五〇	・二二
日本演劇の研究	高野辰之著	四・〇〇	・三〇
日本演劇の研究（第二集）	高野辰之著	五・〇〇	內・二七
文藝當座帳	菊池寛著	一・五〇	・一八
文藝評論	正宗白鳥著	一・八〇	・二〇
萬葉・漫筆	佐々木信綱著	二・〇〇	・二〇
硯友社と紅葉	江見水蔭著	一・五〇	・一八
空中征服	賀川豐彦著	一・〇〇	・一八
文禄舊譯 天草本伊曾保物語	新村出著	三・〇〇	・二四
革命後のロシア文學	昇曙夢著	二・〇〇	・二〇
壽々	志賀直哉著	二・五〇	・二二
雨蛙	志賀直哉著	二・五〇	・二二
沙羅の花	芥川龍之介著	二・八〇	・二二
直輔の夢	里見弴著	一・五〇	・二〇
第三の隱者の運命	武者小路實篤著	一・九〇	・二〇
愛慾	武者小路實篤著	一・六〇	・一八
ある心の影	正宗白鳥著	一・六〇	・一八
安土の春	正宗白鳥著	一・三〇	・一六
歡迎されぬ男	正宗白鳥著	一・五〇	・一八
血と砂	イバニエス著 [illegible]譯	二・六〇	・二二

鬼火の踊り	ジョルジュ・サンド著 田沼利男譯	一・八〇	・一八
東京へ	藤森成吉著	二・三〇	・二〇
惱み笑ふ	藤森成吉著	一・三〇	・一六
故鄕	藤森成吉著	一・五〇	・一八
脂粉の顏	藤村千代著	二・三〇	・二二
海神丸其他	野上彌生子著	一・三〇	・二〇
佗しすぎる	佐藤春夫著	一・六〇	・一八
二人の獨り者	近松秋江著	二・〇〇	・一八
一つの時代	犬養健著	二・五〇	・二二
則天武后	柳原燁子著	一・六〇	・一八
嬰兒殺し	山本有三著	二・〇〇	・二〇
戀愛病患者	菊池寛著	一・五〇	・一八
啓吉物語	菊池寛著	一・〇〇	・一八
第二の接吻	菊池寛著	二・〇〇	・二〇
奔流	三宅やす子著	二・三〇	・二〇
みつけもの	[illegible]著 鈴木[illegible]譯	一・五〇	・一八
一週間	リベヂンスキイ著 池谷信三郎譯	一・八〇	・一八
幻の部屋	北村壽夫著	一・六〇	・一八
薄命のヂュード	トーマス・ハーディ著 内多精一譯	三・二〇	・二四
愛憎篇	長田秀雄著	一・六〇	・一八

海村	有島生馬著	二・五〇	・二〇
暮れゆくマルタ	ヨルヒ・ジュコフスキー著 清見陸郎訳	一・〇〇	・一六
饅屋五兵衛父子	中村吉蔵著	一・五〇	・一八
小説六つ	野上彌生子著	二・七〇	・二二
クリッペン事件	フィルソン・ヤング編 村上雷太郎訳	二・〇〇	・二〇
盲	真山青果著	一・八〇	・二〇
仲子	中條百合子著	二・五〇	・二四
新選夏目漱石集	夏目漱石著	一・〇〇	・二〇
新選前田河廣一郎集	前田河廣一郎著	一・〇〇	・一八
新選藤森成吉集	藤森成吉著	一・〇〇	・二〇
新選永井荷風集	永井荷風著	一・〇〇	・一八
新選久保田万太郎集	久保田万太郎著	一・〇〇	・二〇
新選武者小路實篤集	武者小路實篤著	一・〇〇	・二〇
新選吉田絃二郎集	吉田絃二郎著	一・〇〇	・二〇
新選横光利一集	横光利一著	一・〇〇	・二〇
新選谷崎潤一郎集	谷崎潤一郎著	一・〇〇	・二〇
新選宇野浩二集	宇野浩二著	一・〇〇	・二〇
新選森鷗外集	森鷗外著	一・〇〇	・二二
新選葉山嘉樹集	葉山嘉樹著	一・〇〇	・一八
新選菊池寛集	菊池寛著	一・〇〇	・二〇
新選北原白秋集(詩歌篇)	北原白秋著	一・〇〇	・二〇
新選小山内薫集	小山内薫著	一・〇〇	・二〇
新選長田幹彦集	長田幹彦著	一・〇〇	・二二
新選岡本綺堂集	岡本綺堂著	一・〇〇	・二二
新選北原白秋集(散文篇)	北原白秋著	一・〇〇	・二〇
新選前田河廣一郎集(續篇)	前田河廣一郎著	一・〇〇	・二二
新選山本有三集	山本有三著	一・〇〇	・二〇
新選近松秋江集	近松秋江著	一・〇〇	・二二
京の皿	佐佐木茂索著	二・三〇	・二二
駒鼠	横瀬夜雨著	三・五〇	・二八
	黒島傳治著	一・〇〇	・一八
全集(現代篇)	田中貢太郎著	一・五〇	・一八
全集(歴史篇)	田中貢太郎著	一・五〇	・一八
全集(全五卷)	葛西善藏著	二・五〇	・二二
大佛次郎著	大佛次郎著	一・五〇	・二四
大佛次郎著	大佛次郎著	一・五〇	・二二
大佛次郎著	大佛次郎著	一・五〇	・二二
大佛次郎著	大佛次郎著	一・五〇	・二二
佐藤春夫著	佐藤春夫著	二・〇〇	・二〇
武林無想庵著	武林無想庵著	二・三〇	・二〇

文明病患者	武林無想庵著	二・三〇	・二〇
青銅の基督	長與善郎著	二・〇〇	・二〇
工場	細井和喜蔵著	二・〇〇	・二〇
奴隷	細井和喜蔵著	二・〇〇	・二〇
無限の鐘	細井和喜蔵著	二・〇〇	・二〇
農夫喜兵衛の死	中西伊之助著	一・七〇	・一八
哀しき父	葛西善藏著	一・〇〇	・一八
縁談	里見弴著	二・三〇	・二二
此世は如何にして終るか	フラマリオン著 高橋訳	二・〇〇	・二〇
現代代表自選歌集 朝の螢	齋藤茂吉著	一・五〇	・一八
同 十年	島木赤彦著	一・五〇	・一八
同 川のほとり	古泉千樫著	一・八〇	・二〇
同 松の芽	中村憲吉著	一・八〇	・二〇
同 海やまのあひだ	釋迢空著	一・八〇	・二二
同 立春	木下利玄著	一・八〇	・二〇
同 花樫	北原白秋著	一・八〇	・二〇
同 人間往來	與謝野晶子著	一・八〇	・一八
同 原生林	前田夕暮著	一・八〇	・二〇
同 空を仰ぐ	土岐哀果著	一・八〇	・二〇
同 野原の郭公	若山牧水著	一・八〇	・二〇
同 機の木	窪田空穂著	一・八〇	・二〇
同 ひとの子	古泉千樫著	二・五〇	・二四
同 歌集 屋上の土	加藤一夫著	二・〇〇	・一八
同 亂舞する焔	阿部次郎著	一・九〇	・一八
同 郊外雑記	倉田百三著	二・二〇	・二〇
同 超克	賀川豐彦著	二・〇〇	・二〇
同 星より星への通路	長谷川如是閑著	一・八〇	・一六
同 犬・猫・人間	堺利彦著	一・五〇	・一六
同 外劇の一幕	中澤臨川著	一・五〇	・一六
同 の庭	高濱虚子著	一・七〇	・一六
同 前の朝	武者小路實篤著	一・一〇	・一四
同 筆の向くまゝ	河東碧梧桐著	一・二〇	・一六
同 二重生活	新村出著	二・五〇	・二〇
同 南蠻更紗	野口米次郎著	一・八〇	・一六
同 先驅者の言葉	野口米次郎著	二・〇〇	・二〇
同 坐る人間の評論	宮田溪仙著	三・〇〇	・二六
同 八十一話	岸田國士著	一・八〇	・一八
同 言葉・言葉・言葉	幸田露伴著	二・五〇	・二四
同 幽記	幸田露伴著	二・五〇	・二〇
同 龍	幸田露伴著	二・五〇	・二〇
同 野原の郭公	若山牧水著	一・八〇	・二〇

朝鮮自由主義者	朝鮮自治論	朝鮮の現狀	朝鮮の生活と時代	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想
朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想	朝鮮人の性格	朝鮮人の思想

卷